



1950年代の服飾文化と「教養」の言説 : 文化服装学院での事例を中心に

五十棲, 亘

(Citation)

社藝堂 : journal of social aesthetics, 8:115-136

(Issue Date)

2021

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008834>



1950 年代の服飾文化と「教養」の言説

——文化服装学院での事例を中心に——

五十棲 亘

要旨:

本稿では、文化服装学院での事例を中心に、洋裁の技術に付随して語られた「教養」の言説が、洋裁学校を中心とした人々のコミュニケーションのような、1950 年代特有の服飾文化のあり方といかなる関係を取り結んできたのかを分析した。そして、それら「服飾文化と教養」の言説が、洋裁学校での学校教育のカリキュラム、機関誌である『装苑』、学院や雑誌での学生/読者の共同体といった相互に関連し合う場同士の連関に対して果たした役割の一端を検討した。

キーワード:

洋裁文化、文化服装学院、装苑、ファッション、教養

0. 序

日本の服飾史、あるいはファッション史において、1950 年代は主として「洋装化」と「洋裁文化」の時代として語られてきた¹⁾。すなわち、戦後に和服から洋服へと人々の装いが急激に変化する中で、その洋服をいかに用意するかをめぐり、百貨店や洋裁店はもちろん、「衣服を作る」技術を提供した洋裁学校や製図法、衣服製作のためのミシン等の機械、あるいは服飾雑誌のようなメディアが流布し、衣服と人々との関係性を構築してきた時代といえることができる。それゆえ、1950 年代の「洋装化」と「洋裁文化」の歴史的意義に関しては、戦前からの「衣服の近代化」に対する連続と断絶といった視座を主軸に、欧米圏の服飾文化に対する日本のメディアでの表象や、洋装化が

もたらした複数の価値規範の折衝、あるいは 1960 年代以降の消費文化の揺籃期としての洋裁文化の固有性や地域性といった多様な論点が議論されてきた²。

こうした洋裁文化と接点をもった人々のあり方を考察する上で、洋裁学校の学生とデザイナーや批評家の役割を兼ねた教員との関係性や、洋裁学校の機関誌であった服飾雑誌のメディアとしての特性が、洋裁文化の特徴として挙げられる。とりわけ言説・メディア研究においては、衣服を中心的に取り扱った雑誌の黎明期であったがゆえに、単に流行を創出し、読者の消費を喚起するだけではない、多義的な場としての服飾雑誌の役割が明らかにされてきたといえる³。しかし、洋裁学校が林立し、衣服を作る技術が培われた洋裁文化において、衣服の生産・流通・消費に関わった人々によるコミュニケーションのあり方が、同時代の言説とどのような関係を取り結んだのか、といった視点での研究は多くない。そこで本稿では、洋裁文化における人々の関係性に影響を与えた要因の一つとして、当時の洋裁教育に要請される形で増加していく学生や読者の「教養」への関心とそれに対する言説に着目する。そして、洋裁技術の習得に付随して語られた「服飾文化と教養」に関する言説が、洋裁学校や服飾雑誌といった場に生じた人間関係の形成といかに関わってきたのかを明らかにしたい。

本稿では、とりわけ洋裁学校である文化服装学院での事例に着目し、主たる分析対象として、学院で 1950 年代に行われた洋裁教育のカリキュラムや、学院の機関誌『装苑』(1936-)や文化服装学院同窓会・学友会の会誌『すみれ』(1931-)、学院の理事長であった遠藤政次郎が常務理事を務めた「被服文化協会」の発刊する研究雑誌『被服文化』(1949-72)を挙げたい。中でも『装苑』に関しては、文化服装学院に関する諸記事や、「教養記事」に分類される記事、及び編集者と読者間で意見が交わされた「読者投書」を中心に誌面の分析を行う。以下では、まず文化服装学院にて行われた洋裁教育の中でも、技術教育と並行して重視されていた「教養教育」の内実を詳らかにしながら、「洋裁教育と教養」をめぐる問題がどのような背景の上に存在するかを指摘する。次いで、そこでの指摘が単に洋裁学校の授業内のみならず、服飾文化を構成するメディアやその読者による言説、あるいは学生・読者・教員を含む共同

体によって構築されてきたものであることを述べる。そして、洋裁教育のなかで教養を重んじる側面が、当時の洋裁文化やファッションをはじめとした消費文化といかに結びつき、それらを支えることに寄与したのかを検討したい。

1. 洋裁教育と教養の言説

文化服装学院にて行われた洋裁教育のカリキュラムを概説する前に、まずは 1950 年代の洋裁学校全体に関する状況とそこでの文化服装学院の位置づけに関して概説しておきたい。井上雅人が詳述しているように、戦前から戦後にかけての洋装化やそれに伴い急増した洋裁学校、及びそれらの行為者としての女性達を取り巻く文化運動の総体は「洋裁ブーム」と呼称された⁴。洋裁教育は戦前期には主に高等女学校をはじめとした女子教育の中で行われていたが、関東大震災以後は徐々に洋裁を教える専門の学校が開校され、井上の調査にもあるように、洋裁学校の学校数は 1948 年には 689 校であったものが、52 年には 6748 校へと、そして和・洋裁学校の学生数も 1953 年には 458371 人に及ぶまでに増加していた⁵。こうした洋裁学校の乱立期にあって、その中心的存在となっていたのが、文化服装学院である。

文化服装学院は、1919 年に並木伊三郎が開業した並木婦人子供服裁縫教授店を前身とし、1923 年に日本で初めての服装教育の学校として認可された文化裁縫女学校を経て、1935 年に財団法人並木学園の設置が認可され、1936 年に「文化服装学院」と改称された洋裁の専門学校である。本稿が主として対象とする 1950 年代当時の学校法人並木学園(1973 年に学校法人名を文化学園に改称)の下部組織には、教育部門として文化服装学院、1950 年に開校された文化女子短期大学、1957 年に開始された文化服装学院通信教育部に加え、管理部門として法人本部、収益事業部門として文化服装学院出版局・購買局・事業局、関係部門として文化服装学院連鎖校協会が存在していた⁶。関東大震災直後の開校当時は、生徒が 4、5 人であったと語られているが⁷、1954 年には、職員(学院教員、学院事務及寄宿舍、出版局・購買局)535 名、

生徒数約 8,800 名、卒業生徒数は 81,000 名を超える学校となっていた⁸。「本学院が服装専門学校として名実ともに日本における最大の教育機関でありかつその存在が世界的なものである」と述べられるように⁹、文化服装学院は杉野芳子率いるドレスメーカー女学院と並び、当時の日本の洋裁学校では最大級の学校数と生徒数を誇っていた¹⁰。

これほどまでに文化服装学院が学校数や学生数を増やし、とりわけ 1950 年代の洋裁ブームの中心的存在となった要因として、1963 年には優良連鎖校数 351 校、在学生総数約 12 万人に及んだ連鎖校システムによる学校経営の方法¹¹や雑誌『装苑』の存在がある。『装苑』は、文化服装学院の東京本校をはじめ、連鎖校の在校生や卒業生を主たる読者とし、それらに加えて入学を検討している学生やその他の読者に対して発刊された学院の機関誌として、文化服装学院出版部より 1936 年に創刊されている¹²。「本屋には出さず、卒業生と在校生に呼びかけただけ」と後に述べられるように¹³、創刊当初の『装苑』は、写真の頁もなく一冊 10 銭で販売された非常に規模の小さな雑誌であった。しかし、『装苑』は 1963 年時点で月刊発行部数約 50 万部に及び、『ハイファッション』や『ミセス』といった姉妹誌、研究誌の『被服文化』等、その他の雑誌や書籍等の出版物を含めた文化服装学院出版局の年間売上は約 15 億円となり、それらは文化服装学院の学生のみならず幅広い読者に読まれていた¹⁴。このように、文化服装学院は学内で行っていた洋裁教育のみならず、学校経営や服飾雑誌等のメディアを駆使して、洋裁ブームにおけるその地位を築いてきたといえる。

それでは、文化服装学院では実際にどのような洋裁教育が行われていたのか。まず 1955 年時点で入学可能な学科として、昼間部には高等学校卒業生向けの一般コースであり入学者が最も多かった本科に加え、裁断科(普通部・高等部)、研究科、師範科、実習科、デザイン科、男子服科、編物科、また夜間部には裁断科、実習科が設置されていた¹⁵。そして、履修可能な学科目として、洋裁や和裁の実習に加え、理論、服飾美学、手芸、社会、材料学、ミシン、服装史、教育、デザイン、礼法といった講義が行われていた(図 1.2)。

入学者数の最も多かった本科の特徴が「一般教養と専門教育とを併行して修学するに都合よく」と述べられるように¹⁶、文化服装学院で行われた洋裁

技術の学校では技術に偏重して徳育の面を軽視する弊害があります。技術を十分に生かし社会に役立たせようとするには、やはり人間として円満な人格の持主であらねばなりません。服装は人格なりという言葉もあるとおり、人格の向上をはかることは、おのずから服装の向上をはかることにもなります。本学院の生徒がひじょうに礼儀正しく父兄からも深く信頼されているのも、一に教養徳育を重んずるためかと思います。²²

このように文化服装学院では、当時の他の洋裁教育における教養教育の軽視が指摘され²³、それらによって技術教育を補完するのみならず、小田が述べるような「人格の向上」と「服装の向上」が共に目指されていたといえる。こうした理念は、学院の教育が掲げる5大目標に「服装教育の合理的なこと」だけではなく、「徳育に重点をおく」ことが含まれている点からも窺え²⁴、教養教育は学院が行っていた洋裁教育の一つの柱となっていたことがわかる。また、文化服装学院の研究部の部長でもあった教員の野口益栄によると、学院に入学した学生の希望を調査すると、洋裁教育を受ける目的に、教師やデザイナー、店員、家庭での副業といった将来へ向けた職業訓練に加え、「女性の教養」として学習することを挙げる者が多かったと述べられている²⁵。こうした「女性の教養」という言述からは、洋裁の技術を含めた洋裁学校で学ぶことの総体と、女性の家庭内労働と結びつく教養、すなわち花嫁修行をはじめとする「たしなみ」、あるいはそれらと関連した稽古分化との結びつきが推察される²⁶。しかし、学校教育の中で教養を重視する洋裁文化と上意下達の構造によって規範や権威を保持してきた家元制度の相関関係はもちろん指摘し得る一方、洋裁学校における教養教育は、徒弟制に代表される教育史的問題のみに収斂されるわけではない。近代の女子教育と教養との関連に内在する文化史的問題は、音楽文化における女性の趣味的性の受容を分析した歌川光一が指摘するように、「学校教育以外の「家庭教育」「社会(通俗)教育」という分化が確立しきってなかった近代初期における「趣味」の受容」といった論点もまた浮上させる²⁷。すなわち、服飾文化における教養の言説を取り巻く状況もまた、その学校教育の構造のみならず、労働者としての技術/私

教育としての技芸の習得や、中流階級における西洋文化と結びついた趣味性の教化、女性の社会進出や良妻賢母像といった性的役割に関わる規範、そしてファッションのような消費文化との関わりといった多様な問題の結節点として位置付けられるのではないだろうか。

2. 『装苑』の教養記事と服飾雑誌の専門性

こうした状況に対し、服飾雑誌の誌面においても、次第に読者の教養を培う記事に対する要望が増加していく。とりわけ 1950 年代の『装苑』の読者投書欄には、誌面に関する要望が度々寄せられ、それらの中には誌面の構成や記事の内容へと向けられたものも存在していた。例えば、1955 年 7 月号での中島のぶ子という読者による『技術の雑誌か、教養の雑誌か』と題された投書では、以下のような意見が展開される。

洋裁に関すること、裁断、縫い方のコツ、急所などを解り易く丁寧なる記事は、他のどの本よりもすぐれていることは確かに私自身誇りを感じております。しかしそういった頁の数が増せば増すほど、何かしら不足しているものがあるように思うのです。[中略] 一人前の技術者たるべく貴誌を愛読し、そして、研究している人たちはこのままの形で満足できると思います。が、内面表面共に「装苑」にすがっている人たちにとっては、やはりもっともっと教養の頁を増し、充実した内容が欲しいと思うのです。²⁸

1952 年以降の『装苑』では、諸記事に対する目次内のカテゴリーが、「グラビアと口絵」、「教養記事」、「技術記事」、「その他」の 4 点に分類され、雑誌が編集されていた。そのなかでも「技術記事」に分類された項目には、口絵グラビアのデザイン画・写真に対応した製図やそれに対する解説(本誌の別冊付録として製図が掲載された 200 頁程の冊子も度々発刊された)、裁ち方や縫い方、編み方、雑貨の手芸など基礎的な技術講座の記事、あるいは「装

苑相談室」と題された読者の洋裁技術に関する相談を学院の教員や編集者が答える記事等が存在し、洋裁の技術を習得するための非常に充実した記事が誌面を形成していた。それゆえ、洋裁文化における『装苑』の重要性は、洋裁学校の機関誌としての役割だけにはとどまらない。1953年8月号内の『授業料のつむりの雑誌代』と題された投書では、「御誌を求める費用は学校の授業料を納めるのと私には何ら変りはないのです」とあるように²⁹、『装苑』は洋裁の技術を習得する上で、洋裁教育を補完する教科書としても読まれていたことがわかる。もちろん、読者により多様な読み方がなされたことが推察されるが、1950年代の投書欄には、『装苑』に対して洋裁の技法をはじめとした技術に関する記事を誌面に求める意見が多く存在していた。しかし、中島による上記の読者投書は、『装苑』が技術記事を重視する状況に対し、そうした実用的な側面だけにとどまらない誌面の多様性を「教養の頁」によって達成してほしいと望むものである。その一方、1955年9月号内の田浦一美による『装苑に教養の頁を望む方に』と題された読者投書には、中島の投書の掲載を受け、『装苑』の誌面構成に関して以下のように述べられる。

なにも 200 頁に満たない服装雑誌に、経済面だの社会記事だのを要求される人々のあまりにも知識欲のないのには驚いています。なぜなら、装苑に発表してあること以外にも服装に関しては、まだまだ知りたい新しい出来事が、次々と生み出されている現在なのです。私はこれらを余すところなく装苑に掲載して貰えるものならして貰いたいと思っています。装苑が社会面に記事をさいても、わずかに 2、3 頁ぐらいでしょう。私はこの 2、3 頁の教養記事に満足しようとする読書欲のない人々に憤慨させられます。³⁰

田浦の投書は、中島の意見とは対照的に、『装苑』に対して服飾雑誌としての専門性を求めるものの一つである。雑誌の技術記事を通じた洋裁技術の習得それ自体が洋裁文化における人々の文化的素養であったと推察できる一方、上述したように 1950 年代の『装苑』には、中島のような「教養の頁」を求める読者の声に応え、次第に技術を習得する記事以外の項目が増加してい

く。例えば、『装苑』諸記事の執筆者を中心とした座談会をはじめ、服飾に関わる随筆や生地解説、欧米での流行の紹介や解説、服飾史、書籍紹介のような、同時代の服飾文化を紹介・考察する「読み物」全体が教養記事に分類されていた。さらに、服飾に限らず、土門拳や稲村隆正、田村茂といった写真家による「季節の表情」と題された写真の連載や、「近代絵画集」や「装苑美術館」といった連載内でのジョルジュ・スーラやクロード・モネのような絵画に対する解説、あるいはジャン・コクトーや谷川俊太郎の詩をキャプションとして用いた巻頭グラビアのような、諸芸術に関する誌面が度々登場している。また、定期的に服飾に関する詩が掲載された他、1954年6月号における「ゴッホを着る」と題されたフィンセント・ファン・ゴッホの絵画『星夜』をモチーフとした衣服の製作を試みる連載や、1956年10月号におけるファッションデザイナー近藤百合子原案の『ナイロン姫ものがたり おしゃれにかんする・おとなのめるへん』と題された小説をはじめとし、他の芸術文化の形式を服飾と結びつけるような企画も散見される。なかでも「映画」は、繰り返し服飾との関連が誌面で取り扱われ、1952年1月号での河野鷹思「映画の衣裳デザインの話」や1952年12月号での野口久光「映画からモードが学べるか」をはじめとし、映画に見られる衣装や映画とファッションの関わりを取り扱った論考が多数掲載された。さらに、菊田一夫『私の凡てを』を原作に、1954年に市川崑氏の監督によって東宝より映画化された『私の凡てを』では、『装苑』の誌面にモデルとして登場した伊藤絹子が主演を務めている。「ファッションモデルが主人公になった映画は、日本では初めて」と述べられるように³¹、『私の凡てを』は、モデルであった主人公がミス・ユニバースコンテストに参加するという伊藤の半自伝的な物語であり、映画内での東京会館で行われたファッションショーの場面には、文化服装学院のモデル養成科より誕生したすみれモデルグループが出演し、ミス・ユニバースコンテストのために渡米する伊藤演じる道子に対し、彼女の門出を祝う「贈 装苑編集部」と書かれた花環が映される場面も見られる。また、1953年7月に公開された『新江の島悲歌』や1953年12月に公開された三島由紀夫原作の『につぼん製』においても、すみれモデルグループのモデルや文化服装学院の学生が出演し、映画で用いられるドレスのデザインが提供され、学院の校

舎も撮影で用いられている。また文化服装学院は、1954年に「あなたのデザイン」というタイトルで教育用の映画を製作しており、文化服装学院の「内容、外観、装苑の出版局の様子など、生活力に溢れる姿」をおさめられたものが当時数本製作され、連鎖校にも「特別の廉価で頒布」されたこと、あるいは読者に対して場を設けて上映されたことが、『装苑』誌面に記述されている³²。このように、1950年代の『装苑』では、種々の読み物に加え、誌面の内外で服飾の領域と写真や絵画、詩、小説、映画といった他の芸術の形式を接触させるような試みが恒常的に行われ、技術と教養に関する情報が分断されることなく並存していた、あるいはそれを企図した「教養」の頁が組まれていたといえる。田浦のような、服飾専門誌として『装苑』に技術記事を求める読者の声は、こうした状況の中で出てきたものであった。

ここまで見てきた『装苑』での教養記事の掲載に関する読者間の意見のやり取りは、1950年代には投書欄で度々散見されたが、こうした意見の増加は、読者の一方的かつ突発的な要求ではない。田中里尚は、1950年代以降の『装苑』諸記事のカテゴリー整理は、i.流行に関わる視覚的な情報の取得、ii.服飾文化や産業の背景の学習、iii.洋裁技術の習得、といった読書傾向から導き出され、洋裁技術の記事が効率性を優先したがゆえに、服飾世界の記述や考察、意味の開示といった機能は「教養記事」に移されたことを指摘する³³。先に見た読者からの意見は、1950年代の『装苑』が、服飾の専門誌としてだけでなく、「教養記事」を掲載することで服飾以外の領域も雑誌内に包含し始めた矢先に出てきたものであった。また、1967年に刊行された『婦人雑誌の世界編集長から読者へ』では、1951年8月号より『装苑』の編集長を務めた今井田勲と『婦人公論』の編集長であった三枝佐枝子との対談が行われ、そこでは戦後の婦人雑誌において実用と教養に対する読者の関心が近接してきたことを三枝が指摘している³⁴。こうした三枝の意見を受け、今井田は実用記事と教養記事の厳密な区別の困難を語るなかで、「いわゆる物質的な実用ばかりでは、読者はとてもついてきません」と語っている³⁵。さらに今井田は、自身の関わる雑誌に対して、実用性に重きを置くような「現実的な」雑誌は「高嶺の花でない」とし、そうした雑誌の「意義はみとめ」ながらも、自身の手がける雑誌はそうではないと自負する³⁶。このことから、やはり編集

者も既存の読者のニーズに応え、実用記事と教養記事を雑誌内で並列させることで、読者への訴求力を持った雑誌のカテゴリーや形式を模索し、『装苑』を他の雑誌と差異化しようとしていたことが窺える。それゆえ、『装苑』内の「教養」という語彙は、隣接した芸術文化の領域やその慣習を含めた総体に対し、あくまでも服飾の枠組みを通じた知見や素養といった意味して用いられていたことがわかる。つまり、装苑に教養記事が掲載された一つの意義として、服飾文化の領域を他領域に開きながらも、そうした記事を通して再び服飾の領域に読者を引き込む、すなわち洋裁技術の習得と密接に結びつきながら、『装苑』という雑誌の消費者や洋裁学校の学生として洋裁文化を構成する行為者を再生産する役割があったといえる。

そしてその側面は、1960年代以降『装苑』の姉妹誌として発刊される『ハイファッション』や『ミセス』の中でより重視されることになる³⁷。とりわけ『ハイファッション』の創刊された1960年には、伊東茂平が編集責任を担っていた『私のきもの』の後継誌『モードエモード』や、婦人雑誌『婦人画報』の姉妹誌『Fujin gaho mode』といった、高級既製服を積極的に紹介する雑誌が軌を一にするように登場し、実用性に根ざした教科書的な洋裁の技法やパターンが誌面から消える代わりに、華やかな写真と美辞麗句に彩られた「見る雑誌」と多くのページが読み物に割かれた「読む雑誌」としての側面が強くなる³⁸。また、神野由紀は、美に対する価値判断能力という啓蒙思想的な観念が、消費の文脈との接点をもつことで中間文化を創出するひとつの要因となり、趣味といった観念が教化されたことを指摘している³⁹。こうした消費文化と教養との関係性を考えると、洋裁学校の学生や雑誌の読者は、衣服を製作する生産者である一方、その生産行為を通して布地や装飾品、ミシンなどの機械、そして雑誌それ自体やそこに掲載されている情報の消費者であった側面も看過することはできない。つまり、1960年代以降の服飾雑誌史にも連なるような、『装苑』が「読む雑誌」としての性格を獲得していく過程で、様々な教養記事を誌面に導入したことは、「教養」の語彙に紐づけられる読者の趣味性の教化とともに、服飾に関連した読み物を掲載することで、ある種の消費者教育を行なっていたといえる。すなわち、『装苑』の教養記事からは、雑誌を通じて「教養」という観念それ自体が消費物となっていた側

面を指摘できるとともに、衣服が作るものから買うものへと変化する移行期において、その言説が消費文化と結びつくことで、衣服の生産者から消費者を作り出す装置として服飾雑誌の内実と役割もまた変容してきたことがわかる。それゆえ、服飾文化での教養を重んじる側面は、洋裁学校の学生、及び雑誌の読者の需要が、衣服を生産する技術や場から、彼らのアイデンティティと結びつく商業的な製品の消費やコミュニケーションといった社会・経済的側面、あるいは衣服の審美的価値やそれへの文化的関心へと転じたひとつの表徴としても見ることができるのではないだろうか。

3. 洋裁ブーム下の学生・読者共同体

ここまで見てきたように、戦後の『装苑』では、洋裁の技術を習得する「実用記事」に対し、服飾の枠組みを通した知見や素養を育む「教養記事」を雑誌に掲載することで、雑誌の形式を模索し、読者を獲得してきた。しかし、久井栄輔も指摘するように、戦後の婦人雑誌にも見られたような「実用」と「教養」に対する二項対立的な区分は、雑誌内で展開された生活に関わる啓蒙と社会的階層との関係が、いかなる動態的特徴を持っていたかを見えづらくする⁴⁰。重要であるのは、雑誌内の実用/教養という区分だけではなく、人々の教養に関する議論が雑誌を取り巻く言説空間を介してなされてきたことにある。そこで以下では、『装苑』での消費文化と結びつくような教養記事とそれに順応する読者を用意した背景として、洋裁学校や雑誌を介した人間関係がどのように存在したのかを示したい。

1950年代の洋裁学校内での学生共同体として、戦前に「すみれ会」と称された文化服装学院の同窓会が1950年に改称し結成された「文化服装学院学友会」の存在が挙げられる。学友会では文化部と体育部に分かれたクラブ活動や委員会活動が行われ⁴¹、学友会が1931年より年に一度発刊した会誌『すみれ』には、同窓会や学友会の活動報告はもちろん、学院の日々の行事を詳細に記した日誌や連鎖校の報告、学友会研究部による研究発表、同窓会会員の随筆や詩歌、学生や卒業生によるコラムが収められ、学友会は会員の懇親

の場となっていた。とりわけ 1950 年代の学友会文化部は、文学の講座や読書会、美術館での作品鑑賞のような日々の活動に加え、学生による演劇や映画の自主制作、定期的な音楽会の開催、1960 年には蔵書量 4500 冊以上を誇り後の学院の図書館となる図書部や、すべての文化部での外部講師を招聘した講演のように、その活動は多岐にわたっていた。文化部の活動目的が、「服装の学習を専攻する当然の結果として、他の一般教養に対する視野が狭められることをカバーする目的をもっていた」と語られるように⁴²、それらは先述した洋裁学校での教養教育を補完する形で行われ、例えば 1954 年には谷川徹三による「教養としての文学」といった講演や、1959 年には井坂行男による連続の「教養講座」が開催された旨が記されている。さらに学友会の委員会活動では、文化祭や体育祭といった学内の行事に加え、服飾コンクールや毎年行われた学内のファッションショー、学友会の運営費を賄うためのバザーの企画・運営がなされた。学友会の主催したコンクールやファッションショーは、『すみれ』のみならず『装苑』とも連動し、1956 年に『装苑』の創刊 20 周年を記念して創設された「装苑賞」は、長年の学友会活動の延長に存在するものとして、後に小篠順子や高田賢三、山本寛斎、山本耀司をはじめとしたファッションデザイナーを輩出する、服飾業界でも非常に大きなコンクールの一つとなった。

また、学外の人々も含めた共同体としては、雑誌『装苑』を基軸としたものが挙げられる。上述したように、機関誌『装苑』の読者投書欄には読者から雑誌に対して多様な意見が寄せられ、ときには誌面上で文通のようなやりとりがなされたが、『装苑』の投書内で繰り広げられた人間関係の形成と広がりは、読者間での友達作りに始まり、洋裁を通じた共同体の形成にまで発展した。例えば、1954 年 11 月号では、久保田ふき子という読者から『研究会の結成』と題した以下の投書が寄せられる。

私たちは今度「装苑」を中心に、「被服研究会」を結成しました。加入生徒は現在二十二名です。もちろん学校にはいろいろなクラブがあって自主的に研究をしておりますが、私たちは「被服に関する技術の向上、教養と奉仕」をモットーに組織いたしました。「ライト・オア・レフト」

「流行のシルエットを作る」「秘訣をたずねて」などを教材に真剣に勉強いたしております。⁴³

この記述からは、久保田の研究会では、『装苑』をはじめとした雑誌の諸記事が「教材」として参照され、20名以上の規模で洋裁技術の向上が図られていたことが窺えるが、その目的が「被服に関する技術の向上、教養と奉仕」と述べられていることに着目したい。文化服装学院の学友会もまた、「本会は会員各自が身体を練り教養を深めることによって各自の個性を伸ばすとともに、互いに親しみ合い助けあって学生生活を楽しいものにし、服装文化の向上のため尽すとともに本学院の発展をはかること」が目的であると述べられるように⁴⁴、洋裁の技術を研鑽する共同体が形成された要因のひとつとして、やはり構成員の教養を会得することが目的とされていたことがわかる。学院の学友会副会長であった本村伝吉は、「技術教育の場における教養の問題」と題された小文の中で、とりわけ洋裁学校の学友会をはじめた学生の共同体において、技術のみならず教養の会得が目的として掲げられる理由が以下のように述べられる。

あけすけにいうなら、洋裁学校の生徒といわれることに、感じやすい青年期の女性はひけ目をおぼえるらしいです。大人の目から学業に貴賤なしとしてみたところで、職業教育に自覚浅い日本では独り洋裁学校の生徒ばかりではないはずだし、わけて教養の浅い深いが知識の幅で決められがちな現状では高校を出て一学期すぎた同級会などで、大学へ行ったものと行かないものとの一般教養的な知識の差に自信を失いがちなもの、あながち責めるわけにもゆかないのではないのでしょうか。⁴⁵

この意見は本村の主観的なものではあるが、ここには洋裁教育、あるいは洋裁文化と女性の教養との関係性を考察する上での重要な論点が窺える。それは、洋裁学校の在學生や卒業生が、そこで習得した技術や技芸のみならず、「知識の幅」で決定される彼らの知的水準に対しても他者からの視線に晒され、人間の資質を判断されるような「文化資本としての教養」に関わる問題

である。洋裁教育を行う教育機関は、その多くは「各種学校」に分類されていたように、四年制の大学、あるいは短大とは異なる教育を行う技術・職業教育の専門的な機関として位置付けられていた。また、稲垣恭子は、戦前の女学生文化が近代的な知識や西洋文化を包摂する「モダンな教養文化」、伝統的な和漢や、茶道、華道、琴、三味線などを含む「たしなみ文化」、雑誌や映画、ラジオなどのメディアを媒介し、女学生のサブカルチャーとして創出された「大衆モダン文化」の三つの領域に図式化し、それらは各々が接触・融合しながら文化を形成してきたと述べる⁴⁶。戦後の洋裁教育に求められた教養もまた、社会進出の手段としての技術やたしなみとしての技芸のみならず、大学で行われる教育を補完し、知識に紐づけられるような知見や、洋裁文化に対する身体的な規律や素養といった諸要素の複合体として捉えることができる。それゆえ、洋裁文学校や服飾雑誌における人々の共同体は、服飾に関する種々の場を通じて、モノやそれを取り巻く文化への価値判断、あるいはそれに伴う観念や規範を身体化させた主体が形成した人間関係の一事例として捉えることができる。

さて、洋裁の技術教育とそれに付随する教養の向上を目的とした共同体は、1950年代において全国的に形成されていたことが散見されるが、例えば、1955年7月号に掲載された田中寿男という読者からの『洋裁師を志す娘の父として』といった投書には、文化服装学院の生徒であった田中の娘文子が19歳にして開いた洋裁店を、洋裁を学ぶ場として『装苑』の読者に開放する旨が記載されている⁴⁷。こうした田中の投書には反響があり、1956年1月号において、再び田中から『読者だけの洋裁研究所』という投書が寄せられる。先の投書に対して150名以上の読者からの激励や希望が田中のもとに届き、「すみれ洋裁同志会」という研究会及び研究所を創設・開所することが述べられる⁴⁸。田中は「十月十日に装苑の編集部の人たちにもきていただき、めでたく開所式をすることが出来ました」とも述べていることから⁴⁹、私的な研究会に少なからず『装苑』の編集部、つまり文化服装学院の人間が介在していたことがわかる。このように、素朴に洋裁技術の向上を目指していた久保田の研究会とは異なり、「すみれ洋裁同志会」では、一流の洋裁師としての資格を持ってもらうことが目指され、そうした仕事を『装苑』の関係者が与

えていたことがわかる。

また、こうした読者共同体に雑誌が介入していく代表的な事例として、「装苑友の会」やそれが派生した「装苑趣味の会」が挙げられる。学友会が文化服装学院の学生による課外活動や学内の自治組織の側面が強い一方、「装苑友の会」は学院の学生のみならず、洋裁を学ぶ学生や装苑の読者を募って日本各地で広範に結成された洋裁研究のための共同体、「趣味の会」は名称の通り学生や読者の「趣味」を共通項とした共同体である。1955年12月号の『装苑』誌面内にて、文化服装学院の円型校舎落成を記念して結成された「装苑友の会」の目的は、以下のように述べられる。

愛読者同志で会を作り、親睦とともに手を携えて洋裁研究にはげみたいという読者のみなさまの要望により、装苑友の会を結成することにいたしました。市町村ごとに一つのグループを結成し、支部を設け、月1回位集まって研究会、懇親会を催したいと思います。最小単位は愛読者5人とし、この友の会に対して本誌は何かと御援助いたしたいと思っています。⁵⁰

「装苑友の会」は全国へと広がり、募集開始の1ヶ月後には300名以上の会員が登録された。そして、誌面内で「装苑友の会だより」という項目がつくられ、毎号その1ヶ月間において結成された全国の諸支部や、会合への参加を希望する読者の住所氏名が掲載され、月に一度開かれた例会でクロッキーやデザイン研究、色彩研究、室内装飾、こけしなどの活動を行った様子が伝えられた。あるいは、こうした『装苑』を介した読者共同体で最も規模の大きいものは、1948年より行われていた「愛読者大会」である。愛読者大会は、その名の通り『装苑』を購読している読者に対して、編集部が日頃の感謝を示すべく、一つの会期内に全国数カ所で開催されたものである。そこでは、文化服装学院の教員/デザイナーや『装苑』の編集部による服飾文化や服飾美学といった学院での講義を模した講演を中心に、『装苑』掲載作品を用いたファッションショー、文化服装学院制作の映画鑑賞、懸賞の抽選などが行われた。

このように、1950年代の洋裁ブームの下では、洋裁学校で行われる教育に対し、そこで習得される技術や技芸、あるいは大学教育によってもたらされる知識や文化的素養を学外で補完・養成するような共同体が各地で形成されていたことがわかる。しかし、当時の服飾文化における学生・読者の共同体が果たした役割は、単に学校から学生へ、あるいは雑誌から読者への服飾文化に関わる文化的素養の教化だけではない。1955年に開催された愛読者大会に参加した読者の斎藤イチ子は、そのときの様子を以下のように語っている。

出版局の方のご挨拶とマダム・マサコ先生の流行についてのお話、それについて、景品の抽選が行われ、それがまたよいものばかりなので、口々にワーワーとざわめいておりました。[中略] 抽選も終りやがてファッションショーです。美しい音楽と共に流れ出るようにモデルが出て来ました。次々と目をみはるうちに松田和子が四人目に出てくると一斉に歓声があがりました。美しいというより発刺としたジュニアモデルです。写真より—そう個性のはっきりした可愛いという感じです。⁵¹

『装苑』のジュニアモデルであった松田和子に対して抱いた「写真より—そう個性のはっきりとした」という印象からは、斎藤の愛読者大会での経験が、誌面を通じて形成されたイメージと比較されたものであることがわかる。こうした言述からは、『装苑』の誌面外で生じた読者の経験にも、誌面内のテクストが多分に関わっていたことが窺える。さらに、1956年2月号では、そのときの様子が写真やキャプションによって再び誌面の一部として可視化された。モデルにサインを求める群衆や舞台上でマダム・マサコに花束を渡す読者の写真、「雑誌と愛読者を結ぶ楽しい一日がくりひろげられました」といった誌面内のキャプションは⁵²、愛読者大会の規模の大きさを示すだけでなく、その中心にあった『装苑』とそれを取り巻く読者の存在を示唆する。北田暁大が指摘するように、愛読者大会をはじめとした「誌面の延長として生まれたはずの《私的な公共圏》の擬制を担保する各種イベント」は、「翻って誌面における意味空間を支える不可欠の装置」として⁵³、『装苑』を広く伝

播するにあたり、とりわけ重要な機能を果たしていたのである。つまり、『装苑』を基軸とした様々な読者共同体もまた、規模の大小にかかわらず、雑誌という言説メディアと学校という空間メディアの間に置かれ、その両者を強固に結び付け、洋裁学校と雑誌を共に巨大化させる一因となっていた。こうした要因として、やはり学校空間を「連鎖校」といったグループ化により展開した文化服装学院の学校経営が大きな役割を果たし、学生/読者を拡大していく補助輪となっていたことが示唆される。つまり、鼠算的に増えていく学校を基軸として、雑誌の読者を潜在的な学生として誌面の空間において取り込むことに成功したからこそ、こうした共同体の形成が可能となったのではないだろうか。このように、洋裁学校・学生/読者・雑誌の三角関係には、学校や雑誌を介して人々の教養を養成する共同体を構築するとともに、それらが翻って学校や雑誌を含めたシステム自体を上げ、1950年代の洋裁文化を形成していた側面が明らかとなる。

4. 結

本稿では、ここまで1950年代の服飾文化に見られた「教養」の言説と、洋裁学校やそこで発刊されたメディア、あるいは洋裁学校の学生や雑誌の読者との連関を検討してきた。そして、それらの関係性を、洋裁学校の教育史的問題のみならず、服飾雑誌やそこから出来た読者共同体といった文化史、あるいはメディア史的な観点より論じ、「教養」という語彙が1950年代の洋裁文化と重なることで持ちうる意味を再考した。

これまでの議論からは、第一に、1950年代の服飾文化における「教養」が、「服飾文化に対する文化的素養」といった意味としても用いられていたことが明らかとなった。こうした「教養」の意味から1950年代の服飾文化を見することで、服飾の領域が他の芸術・文化の領域との接点を作り出すことで形成された文化の様態と歴史性に焦点を当てることができる反面、「教養」という観念それ自体が服飾雑誌の消費を促す一つの要因となっていた側面もまた指摘される。そして第二に、服飾文化における「教養」の言説は、洋裁学

校や服飾雑誌を基軸とした共同体において、教員や雑誌の編集者、学生/読者による広範なネットワークを形成する一つの要因でもあった。教養の言説を基軸に結びつく洋裁学校の学生や読者は、単に文化的生産物を消費する受動的な存在ではなく、洋裁学校やメディアといった種々の場における生産・流通・消費のすべてに関与している能動的な行為者でもあり、そのことが学校や雑誌を含めた服飾文化を拡大する一因となっていた。また第三に、戦後の洋裁文化における教養の重視と服飾雑誌の関わりは、1960年代以降の消費文化、あるいは衣服の審美的価値やそれらへの文化的関心を用意したひとつの要因であったことが指摘された。このことから、服飾雑誌に掲載された教養に関する言説が、洋裁技術の習得とより密接に結びつきながら、読者や洋裁学校の学生に対する消費者教育を行うとともに、服飾文化を構成する行為者として彼らを再生産する役割があったといえる。

このように、洋裁文化において人々に求められた「教養」は、教養教育を通じた個々人の振る舞いのみならず、学校や雑誌を介した共同体や、メディアの形式に影響を与えた側面が指摘された。とりわけ、1960年代以降、服飾雑誌の「読み物」としての側面が更に重視されていくことを鑑みると、1950年代の『装苑』における教養記事の増加は、その後服飾雑誌が洋裁学校の機関誌を脱し、洋裁学校の学生とは異なる読者を獲得していく上で非常に重要な転換点だったといえる。つまり、『装苑』での「読むこと」をめぐる読者の要望の増加と雑誌内での位置づけの変化は、1960年代以降に服飾雑誌が「衣服を買う」ための雑誌へと変化する前段階において、洋裁技術の習得とは異なる目的の読者層を洋裁文化の内部からも用意していたことを示している。その一方、こうした「服飾雑誌に教養を求める読者」のような、服飾の情報と彼らの教養を結びつける人々が存在し得たことは、単に『装苑』が独立して存在していたのではなく、やはり洋裁学校での技術・教養教育と服飾雑誌が結びつきながら洋裁文化を形成していたことが一因にある。それゆえ、文化服装学院での洋裁教育や雑誌『装苑』を通じた学校と読者、雑誌間の動的な関係は、洋裁文化の展開の一端を担っていたといえるのではないだろうか。

注

- ¹ 井上雅人は「総動員体制期から高度経済成長期にかけての日本で形成された、女性服と「洋裁」という技術を中心とした文化の総体」を「洋裁文化」と定義する(井上雅人『洋裁文化と日本のファッション』青弓社、2017年、37頁)。
- ² 上記の観点に関わる代表的な先行研究としては、以下のものが挙げられる。アンドルー・ゴードン『ミシンと日本の近代 消費者の創出』大島かおり訳、みすず書房、2013年;井上雅人『洋裁文化と日本のファッション』青弓社、2017年;小形道正「生活着の着物と衣服を作ること—終戦から1950年代(上・下)」『Fashion Talks』第6・7号、2017-2018年、40-47頁、38-45頁;鈴木彩希「戦後日本における着物の改良をめぐる流行創出の試み:田中千代の「ニュー・きもの」を中心に」『服飾美学』第66巻、2020年、57-76頁
- ³ とりわけ本研究で取り扱う雑誌『装苑』が、日本の洋装化に対する重要な役割を果たしたことを論じた研究に関しては、以下のものがある。工藤雅人「「服飾雑誌」の歴史的成立—1950～60年代の『装苑』の誌面構成と読者の変容に焦点を当てて—」『マス・コミュニケーション研究』第76巻、2010年、157-176頁;田中里尚「「おしゃれ」と女性～1950年代のファッション言説と消費社会化～」『境界を越えて』第5巻、2005年、55-84頁
- ⁴ 前掲『洋裁文化と日本のファッション』、17-20頁
- ⁵ 同書、114-115頁
- ⁶ 『文化服装学院 40年のあゆみ 付録』文化服装学院、1963年、3-7頁
- ⁷ 「5人から10,000人への道」『装苑』1955年12月号、235-237頁
- ⁸ 「文化服装学院の沿革と元凶及び主任教員と講師」『装苑』1954年12月号、234-235頁
- ⁹ 「文化服装学院入学志願者のために」『装苑』1955年12月号、238頁
- ¹⁰ 青地農による1954年の調査では、「現在、日本の洋裁学校の勢力分野は、文化系-40、ドレメ系、40、田中千代系-5、伊藤茂平系-5、その他大勢と言うところだそうだ」といった記述がある(青地農「ライバル物語 第4回 文化対ドレメ」『婦人公論』第39巻第4号、1954年、199頁)。
- ¹¹ 連鎖校システムとは、「卒業生が経営又は指導にあたっているが、文化服装学院の教育内容に準じた教育を行っている洋裁学校のうち、規模、教育内容、経営状況、教員組織等を審議して内容の優良のものを本校が認可して全国に設置しているもの」である(前掲『文化服装学院 40年のあゆみ 付録』、28頁)。
- ¹² 創刊当時の誌面のサイズはB5版で、創刊当時の頁数は32頁、価格は10銭、発行部数は約2,000部であった。終戦後は、復刊第1号の頁数は44頁で価格は5円から始まり、1956年頃には約200頁で価格は170円-180円ほどで販売されていた(「装苑についての20の質問」、『装苑』1956年10月号、224-227頁)。
- ¹³ 同記事「装苑についての20の質問」、224-225頁
- ¹⁴ 前掲『文化服装学院 40年のあゆみ 付録』、20-23頁
- ¹⁵ 「学校案内」『装苑』1955年12月号、239頁

- ¹⁶ 前掲「学校案内」、239 頁
- ¹⁷ 野口益栄「洋裁教育における細目のたて方」『被服文化』第 38 巻、1956 年、51 頁
- ¹⁸ 同記事、52 頁
- ¹⁹ 前掲「洋裁教育における細目のたて方」、54 頁
- ²⁰ 小田は、「洋裁学校の教養科目について」と題された小論において、社会科の位置づけに関し、「専門的に深めてゆくと同時に、その専門の知識、技能を活用することのできる視野と、人間性を陶冶すること、この要請のもとに存在するのが、社会科でありましょう」と述べている(小田周洋「洋裁学校の教養科目について」『被服文化』第 38 巻、1956 年、45 頁)。
- ²¹ 同上、46-47 頁
- ²² 前掲「文化服装学院入学志願者のために」、238 頁
- ²³ しかし、四年制大学の家政学部をはじめとした教育機関において、1950 年代に教養教育が行われていなかったわけではない。例えば、共立女子大学家政学部部長であった山本ラクによると、1956 年の共立女子大学被服学科では、和裁や洋裁といった専門科目の他に、一般教育科目として人文科学、社会科学、自然科学、外国語科目として英・仏・独語、さらに、専門科目を補完する教科として被服美学(色彩学、意匠学、服飾美学、東洋美術史、西洋美術史)や被服材料学(被服原科学、織布学、被服整理学、色染学)、被服学(理論被服学、被服衛生学、被服史、被服構成)が設置されていた(山本ラク「共立女子大学被服学科の内容」『被服文化』第 41 巻、1956 年、66-67 頁)。
- ²⁴ 1955 年に文化服装学院が掲げていた 5 大特色として、「服装教育の合理的なこと」、「德育に重点をおく」、「すぐれた教授陣をもつ」、「設備が整っていること」、「民主的な運営であること」が挙げられている(前掲「文化服装学院入学志願者のために」、238 頁)。
- ²⁵ 前掲「洋裁教育における細目のたて方」、52 頁
- ²⁶ 井上雅人は、加藤秀俊の指摘を引用しながら、洋裁文化におけるアマチュアをプロが批評する構造と、俳句や華道の「家元制度」との類似性を述べている(前掲『洋裁文化と日本のファッション』、121-129 頁)。
- ²⁷ 歌川光一『女子のたしなみと日本近代 音楽文化にみる「趣味」の受容』勁草書房、2019 年、10-11 頁
- ²⁸ 「三つの声」『装苑』1955 年 7 月号、189 頁
- ²⁹ 「三つの声」『装苑』1953 年 8 月号、191 頁
- ³⁰ 「三つの声」『装苑』1955 年 9 月号、230 頁
- ³¹ 「映画化されたファッションモデルの生活 東宝作品 伊東絹子主演『私の凡てを』から」『装苑』1954 年 7 月号、62 頁
- ³² 「三つの声」『装苑』1954 年 12 月号、217 頁
- ³³ 田中里尚「服飾雑誌『装苑』にみるアメリカ服飾流行の表象の変容—1930～1950 年代を中心に—」『文化学園大学紀要』第 47 巻、2016 年、76 頁
- ³⁴ 三枝は、「いまの時代は教養即実用というプラグマティックな考え方が世間一般に強くなっていると思うし、さっきおっしゃったように、教養の中にも実用とむすびつくものがあると思うんですよ。[中略] また今までの実用雑誌といわれているものも、

女性の知的レベルの向上にともなう、もっと知的になるべきだと思っています。いずれにしても、最近は教養と実用とは非常に近よってきたことは事実です」と述べている(今井田勲・三枝佐枝子『婦人雑誌の世界 編集長から読者へ』現代ジャーナリズム出版界、1967年、223-224頁)。

35 今井田勲・三枝佐枝子『婦人雑誌の世界 編集長から読者へ』現代ジャーナリズム出版界、1967年、221頁

36 同書、7-8頁

37 1960年代以降、『ミセス』がいかに教養と消費、そして女性性を雑誌の中で結びつけてきたかに関しては、田中里尚「「おしゃれ」と女性イメージ～女性雑誌『ミセス』の1960年代をもとに～」(『デザイン学研究特集号』第16巻、22-31頁、2008年)を参照。

38 『ハイファッション』では、小池千枝やマダム・マサコ、南部あきといった『装苑』の教養記事に執筆していた論者をはじめ、宗左近や東野芳明、木村浩をはじめとする詩人や美術評論家、文学者といった多領域の人間が、読み物のために登用された。そして、秦早穂子「《ベル・エポック》時代のモード」といった服飾様式の歴史や、高階秀爾「ヴィクトリアンモードの背景」といった絵画に描かれた衣服の図像としての解釈、村上信彦「服装における人間解放」、中原佑介「現代装飾論」といったファッション論のように、それらの内容は美術史学や美学、社会学、哲学からの学術的な視点を採用したものであった。

39 神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』勁草書房、1994年

40 久井栄輔『近代日本の生活改善運動と〈中流〉の変容 社会教育の対象/主体への認識をめぐる歴史的考察』学文社、2019年、301-302頁

41 1960年時点には、文化部として演劇部、図書部、文学部、宗教部、美術部、映画部、講演部、写真部、音楽部、編集部が、体育部としてバレーボール部、バスケット部、フォークダンス部、ハイキング部、テニス部、ピンポン部が存在していた。

42 宇田川精一「文化部十年のあゆみ」『すみれ』第11号、1961年、134頁

43 「三つの声」『装苑』1954年6月号、217頁

44 本村伝吉「技術教育の場における教養の問題」『被服文化』第38巻、1956年、48頁

45 同上、48頁

46 稲垣恭子『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社、2007年、210-213頁

47 「三つの声」『装苑』1955年7月号、189頁

48 「三つの声」『装苑』1956年1月号、214頁

49 「三つの声」『装苑』1956年1月号、214頁

50 「文化服装学院円形校舎落成記念三大行事発表」『装苑』1955年12月号、123頁

51 「三つの声」、『装苑』1956年1月号、215頁

52 「盛大な本誌愛読者大会」『装苑』1956年2月号、82-83頁

53 北田曉大『広告の誕生—近代メディア文化の歴史社会学』岩波書店、2000年、141頁